



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3214 号 2016.8.26 発行

相模原殺傷 1 カ月 神奈川県警「被害者実名非公表」 障害者や家族「『なかったこと』にしないで」 産経新聞 2016年8月26日

■「存在を否定」「逆差別」

相模原緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入居者19人が刺殺された事件から26日で1カ月。事件をめぐっては、県警が障害者への配慮などを理由に被害者の実名を公表せず、疑問や批判の声が起きた。障害を持つ人やその家族はどのような思いでいるのか。事件に対する怒りや非公表をめぐる問題について聞いた。(古川有希)

◆命の大切さ

「被害者は何も悪いことをしていないし、小さな頃から慈しんで育ててきた子供を『なかったこと』にするのは違う。実名非公表は親自身が子供の存在を否定していることになる」

「神奈川県重症心身障害児(者)を守る会」会長の伊藤光子さん(74)は、実名公表する意義を強く訴える。

伊藤さんは重い知的障害と肢体不自由を抱えた次女、まゆみさん(48)を支えてきた。まゆみさんの回復を願って病院やリハビリ施設を巡ったが事態は変わらず、「一緒に死のうか…」と思ったこともある。それでも、「心の底から純真で天使のような存在」に癒やされる日々がつらさをはるかに上回り、「子供たちは命の大切さを世の中に示している。決して役に立たない子ではない」との思いを強くした。

伊藤会長は8人が犠牲になった大阪教育大付属池田小学校の児童殺傷事件を引き合いに出し、「池田小事件は遺族や学校、地域が世の中に思いを発信し続けているから今でも風化していない。今回の事件も決して風化させてはいけない」と力を込める。

◆不幸ではない

「驚いた。良いとか悪いとかではなく、普通は被害者の氏名は出るもの」としたのは、重度の脳性まひを持って生まれ、手足と言語に障害を持つ鎌倉市議の千一さん(62)。唯一自由に動く左足の親指で音声の出る機械を操作する形で取材に応じた。

周囲からのあからさまな偏見や人々の心の中にある差別観と常に闘ってきたから、「実名を公表したくない」という家族の気持ちも理解できる。

自身も平成13年から議員活動を続けているが、「健常者の議員は共生社会、心のバリアフリーとか議場ではまことしやかに言います。でも、健常者の議員同士は気が合えば飲みに行ったり視察に行ったりもしますが、僕の場合は一度も誘われたことがありません」と表情を曇らせる。それでも、今回の県警の判断は「逆差別」だと感じたという。

千さんは、女性9人の殺害容疑で再逮捕された植松聖(さとし)容疑者(26)が「障害者は不幸だと決めつけていること」にも憤りを隠さない。

「たとえ寝たきりでも幸せに生きている方もいれば、五体満足でも不幸な方もいます。それぞれの価値観の問題です」

【相模原殺傷1カ月(1)】「日本のためにやった」「私は救世主」植松容疑者、正当化繰り返す

産経新聞 2016年8月26日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入居者19人が刺殺された事件で、元職員の植松聖容疑者(26)＝女性9人の殺人容疑で再逮捕＝が、「日本のためにやった。私は救世主だ」と供述をしていることが25日、捜査関係者への取材で分かった。事件は26日で発生から1カ月が経過。神奈川県警津久井署捜査本部は、植松容疑者が偏見を深め、襲撃を決意した理由などについて捜査を進めている。

捜査関係者によると、植松容疑者は一貫して「障害者は不幸を作る人」「障害者の安楽死を国が認めないので、自分がやるしかない」と犯行を正当化する供述を繰り返している。「(事件に)共感してくれる人はいる」との趣旨の発言もあるという。

中学生時代に障害を持つ同級生と関わったことなどが偏見のきっかけになったとほのめかしているが、反省や謝罪の言葉はないという。

事件は7月26日午前2時ごろ発生。施設に侵入した植松容疑者が約45分間にわたり、入居者の首や胸を刃物で刺し、19人が死亡、27人が重軽傷を負った。県警は殺人未遂容疑で植松容疑者を逮捕し、殺人容疑に切り替えて送検。8月15日に殺人容疑で再逮捕した。

【相模原殺傷1カ月(2)】「計画性」が焦点に 精神状態解明に向け鑑定留置へ

産経新聞 2016年8月26日

「心神喪失で無罪になる」。事件前の2月に衆院議長宛ての手紙でこう主張していた植松聖容疑者は、自らを「刑事責任能力がないと判断される」と思い込み、犯行に踏み切った可能性もある。横浜地検は今後、鑑定留置を行って責任能力を調べる方針だが、精神状態が争点化した過去の重大事件では計画性が重視され、完全責任能力が認定されたケースが多い。

「主張はまったく理解できないが、綿密な準備を推認させる事象は多く、本人なりに計画に沿っている」。今回の犯行について捜査幹部はこう分析する。

植松容疑者は犯行に用いた結束バンドやハンマーを事件前日に購入して準備。衆院議長宛ての手紙で記した「職員は結束バンドで身動き、外部との連絡をとれなくします」という筋書き通りに実行した。「これらは計画性の高さを裏付ける」と捜査関係者はみる。

別の捜査関係者は「『心神喪失で無罪になる』と冷静に判断している点は、逆に責任能力を補強する材料となりうる」と話す。

鑑定留置を経た過去の重大事件では、最終的に計画性が重視されるケースが目立つ。大阪教育大付属池田小学校の児童殺傷事件では、凶器を複数購入していたことなどから鑑定留置の結果、裁判所が男の刑事責任能力を認定。判決でも名門校を狙った計画性を指摘した。

秋葉原無差別殺傷事件でも、犯行当時に殺傷能力の高いダガーナイフを準備していたことなどを重視して責任能力を認定した。

東京工業大の影山任佐名誉教授(犯罪精神病理学)は、逮捕後の尿検査で大麻の陽性反応が出たことについて「大麻で大量殺人に至った例は世界的にもなく、計画性に影響を与えるものではない」と分析し、責任能力に問題はないとの見方を示している。県警は今後、施設西棟に居住していた男性9人に対する殺人容疑で3度目の逮捕をする方針で、負傷者の殺人未遂容疑についても立件する。

【相模原殺傷1カ月(3)】続く家族の苦悩「テロリストに踏みにじられた」 募るストレス

産経新聞 2016年8月26日

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が刺殺された事件は、26日で発生から1カ月となる。「思い出したくもない、おぞましい事件。1人のテロリストにかけがえのない施設が踏みにじられた」。植松聖容疑者(26)に刺され、一時意識不明となった

尾野一矢さん（43）の父、剛志さん（72）は産経新聞の取材に癒えぬ心中を語り、いまだ体育館で暮らす入居者もいる現状を憂えた。

自傷行為も

「1カ月でストレスを募らせているのではないか」。剛志さんは一矢さんの精神状態に不安を隠せない。

剛志さんによると、一矢さんは負傷から順調な回復をみせ、15日に都内の病院から相模原市内の病院に転院した。

だが転院の際、一矢さんは「やまゆり園に帰れる」と期待しており、行き先が病院だったことで一気に失望したという。今は食事を受け付けず、不安そうにうつむくことが多くなった。奇声を上げ、自傷行為を始めることもあるという。

重傷者のうち数人は退院して施設に戻ったが、一矢さんは退院のめどすら立たない。「子供たちがされたように（植松容疑者を）ズタズタにしてやりたい。でも今の日本の法律では復讐することはできない」。剛志さんは強い言葉で植松容疑者を非難する。

「建て替えを」

神奈川県によると、事件発生前に149人が入居していた施設は25日現在、92人が生活している。だが、事件現場で過ごすわけにはいかず、男性26人が敷地内の体育館での暮らしを余儀なくされている。

施設側は、一時的に複数の他施設で過ごしている入居者らについて、同県内の別の障害者施設に一括して移ってもらう方向で検討を進めている。その受け入れ先も来年2月には取り壊しが決定しているという。

入居者家族会は施設の今後のあり方を聞くアンケートを実施したが、未集計ながら大半の家族が「施設建て替え」を希望している。剛志さんも「やまゆり園は入居者や家族にとって、かけがえのない場所だ」と話しているが、金銭的な問題もあり、問題解決は容易ではない。

心身ともに疲労が募る入居者と家族。剛志さんは植松容疑者が衆院議長宛ての手紙で記した「保護者の疲れ切った顔、施設職員の生気の欠けた瞳」という文言に憤りを隠さない。「保護者や職員の実態はそうではない。私たちは犯罪者に負けない。必ず元の施設に戻してみせる」と語った。

【相模原殺傷1カ月（4）】措置入院、進む議論 病院相手取り訴訟…退院後ケアに課題も 産経新聞 2016年8月26日

措置入院解除後だった容疑者による事件を受けて、措置入院のあり方について検討が進む一方、退院後のケアも焦点となっている。家族らの同意で精神障害患者を入院させる「医療保護入院」は、その選択肢になり得るが、患者が病院を相手取り訴訟になったケースもあり、課題もある。事件を受けて有識者らによる厚生労働省の検討会が、措置入院後の対応など再発防止策を今秋にもまとめる。

現状では、措置入院後のケアとして医療保護入院がある。精神保健指定医らの診察と家族または後見人らの同意が必要で、患者本人の意思は関係ない。同意できる立場が法律で認められた保護者1人だけだった要件が平成26年の精神保健福祉法改正で緩和された。

要件緩和には患者側の慎重論もあったが、「病識がない、自分を守る機能が低下している人への適切な医療の提供は人権を守ることにつながる」などの意見で改正された経緯がある。

厚労省の統計では、26年度の措置入院患者数は1479人だが、医療保護入院は17万79件。精神障害による入院患者の割合（25年）は、患者が自らの意思で入院する任意入院が52・8%で、医療保護入院は46・0%。措置入院は0・6%にとどまり、医療保護入院は精神医療の現場で大きなウエートを占める。措置入院解除後のケアとして、医療保護入院と任意入院を併用する医療機関もある。

ただ、患者の自由を制限する制度だけに、患者本人が入院の不当性を訴えた裁判も起き

た。西日本で医療保護入院している男性が、家族の同意で入院させた病院を相手取り、入院取り消しを求めて提訴した。

男性は当初、措置入院していたが、改善したと診断され、法改正以前の25年、保護者と認定された家族の同意で医療保護入院した。しかし、男性は家族が「正当な手続きを経た保護者ではない」と提訴。地裁は「正当な手続きに基づく入院」と訴えを棄却、高裁、最高裁も今年、訴えを退けた。病態を適切に自覚できていない可能性がある患者本人の訴えだが、同種の訴訟が起こる可能性もある。

国立精神・神経医療研究センターの松本俊彦・薬物依存研究部長は「患者と家族が敵対関係にあれば、医療保護入院によって溝がさらに深まることも考えられる。患者の意思とは関係なく入院させる制度であり、運用は難しい。個々のケースで本当に有効かを慎重に検討する必要があるだろう」と指摘している。

【相模原殺傷1カ月（5）】犯行前日に女性と焼き肉 「革命計画書」も準備

産経新聞 2016年8月26日

植松聖容疑者の犯行前の行動はどのようなものだったのか。「革命計画書」を自ら執筆して着々と計画を練っていたほか、事件前日には高級焼き肉店で女性と食事をしていたことが判明。その過程を追うと、犯行の異常性と計画性が浮かび上がる。

植松容疑者が犯行に向けて具体的な準備を開始したのは今年1月ごろ。友人らに「障害者を抹殺することができる」という計画を打ち明け、賛同者を広く募り始めた。

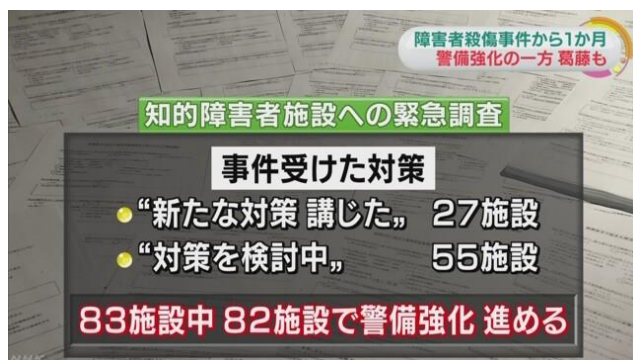
同級生の男性（26）によると、2月ごろ、植松容疑者の自宅に自身が執筆した「ニュー・ジャパン・オーダー（新日本秩序）」と題した計画書のような文書があった。障害者殺害のほか、「医療大麻の解禁」「暴力団を日本の軍隊として採用」などを計画していたという。「このころスーツを着て『革命軍っぽくない？』と話すなど、革命という言葉を繰り返して使っていた」と男性は振り返る。

7月中旬には自宅から大量のごみを出して身辺整理を開始。愛読していた長編ボクシング漫画を友人に譲渡したのも同時期だ。

関係者によると、犯行前日の25日午後にはホームセンターでハンマーや結束バンドなどを購入し犯行を準備。その後、好意を寄せていた女性と東京都内の高級焼き肉店で食事をしていた。犯行の話はおくびにも出さず、焼き肉を食べ続けたという。「最後の晩餐のつもりだったのかもしれない」（捜査関係者）

食事を終えた植松容疑者は、都内のホテルに滞在してから相模原市に戻り、翌26日午前2時ごろ凶行に及んだ。知人の男性は「今も反省した様子はないと聞いて、納得する面もある。本当に革命を果たしたつもりなのだろう」と話した。

知的障害者施設の99%で警備強化 NHK調べ



NHK ニュース 2016年8月26日
相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件から26日で1か月となるのに合わせて、NHKが全国のおよそ90の知的障害者施設に聞いたところ、ほぼすべての施設で防犯カメラの増設など警備の強化を進めていることがわかりました。一方で、警備の強化によって地域とのつながりが失われることを危惧する声も多く、葛藤を抱えながら対策を探る姿が浮き彫りになっています。

NHKでは、先週から今週にかけて日本知的障害者福祉協会に加盟する入所施設のうち、

定員が100人以上の全国89の施設を対象に緊急の調査を行い、93%にあたる83施設から回答を得ました。

今回の事件を受けた警備面の対策を尋ねたところ、「新たな対策を講じた」と回答したところが27か所、「対策を検討中」という回答が55か所と、合わせて82施設、率にして99%とほぼすべての施設で警備の強化を進めていることがわかりました。

具体的な対策として複数回答で最も多かったのが、「安全マニュアルの見直しや策定」で、施設の65%、次いで「施錠の強化」が57%、「侵入者対策訓練の実施」が51%、「防犯カメラの増設」が34%となったほか、「警察への自動通報システム」や「民間の警備会社の巡回」を新たに導入する施設もありました。

一方で、施設からは「閉鎖的な施設を生み出すことにならないか」などと、警備の強化によって地域とのつながりが失われることを危惧する声も多く、これまで目指してきた「開かれた施設」の在り方と逆行することに葛藤を抱えながら対策を探る現場の姿が浮き彫りになっています。

寄せられた葛藤の声

アンケートでは、今回の事件を受けて、ほとんどの施設が警備強化の必要性を認識している一方で、費用面の負担や入所者の人権に対する懸念のほか、地域に開かれた施設の在り方を目指してきた中で、警備の強化をどのように図っていくのか戸惑いや危惧を訴える意見が多く寄せられました。

このうち、関東地方の施設からは「対策を強化しすぎることにより施設を利用される方々の生活環境の悪化や行動制限につながらないような配慮が重要だ」という意見が寄せられました。

中でも最も多かったのが、施設の閉鎖性を危惧する意見で、東北地方の施設からは「防犯対策は当然必要であるが、従来の『開かれた施設』と逆行する結果になり、閉鎖的施設を生み出すことにならないか危惧する」という意見や、中部地方の施設からは「殺意を持った者の侵入は、想定外であり、今後、それを防ぐため何らかの対策は必要だが、一方で地域に開かれた施設作りも目標としてあり、バランスをとるのが難しい」といった意見が相次ぎました。さらに、関東地方の施設からは「塀を高くしたり、セキュリティを高めること、このことは結局、人と人との間に垣根を作ることになる。障害者の生き生きとした姿が目に入りにくくなり、社会へ適応した人間のみの歪んだ社会となる懸念がある」といった指摘がありました。

このほか、東北地方の施設からは「この事件により障害者差別が広がったり、施設が閉鎖的になることがあってはならない。施設は人と人のつながり、利用者と職員の信頼関係、地域の人の支えがあり、コミュニティーの中に存在する。私たちの施設は、地域住民との交流を大切にし、利用者が自由に出入りできる環境を守り、開かれた施設を目指します」と、地域との共生の中で施設の運営を続けていくことの重要性を訴える意見もありました。

警備強化した施設では

知的障害者など100人余りが入所する相模原市中央区の施設「たんぼぼの家」には、事件の後、入所者の家族などから不安の声があがったことから警備体制を強化しました。

まず、不審者の侵入を想定して新たに民間の警備会社の通報システムを導入しました。このシステムでは、施設内の事務所など2か所に設置された通報ボタンを押すと24時間、警備員が駆けつけるとともに、必要に応じて警察にも通報します。さらに、夜勤の職員には持ち運びができる通報ボタンがついた端末を配備することになりました。ほかにも施設の施錠を徹底するほか、新たに玄関に防犯カメラを設置したり、食堂と施設の2階部分のベランダに不審者の侵入を知らせるセンサーを設置したりすることを決めました。

施設では、これまで地元の中学生の体験学習を受け入れたり、夏祭りやクリスマス会に住民を招いたりしてきたほか、地元の祭りにも入所者が出店を設けるなど地域との交流を積極的に図ってきました。「たんぼぼの家」の山田努部長は「利用者を狙った外部からの侵入はこれまで全く想定していなかったので、事件を機に急きょ警備体制を見直しました。

一方で、閉鎖的な施設にしないよう、地域での取り組みはこれからも変わらず続けていかなければならない」と話しています。

識者「施設の在り方が問われている」

ほぼすべての施設が警備の強化を進めているという結果について、障害者の施策に詳しい浦和大学の河東田博特任教授は「施設は生活の場、人が暮らす場であり、これまで地域に開放し、地域の人たちと触れあえるよう地道な取り組みが進められてきた。入所者や家族の不安の声を受けて何らかの対応策を取ろうとしている施設も“苦渋の決断”として、やらざるを得ない状況に追い込まれていると感じる」と話しています。

そのうえで、「事件によって、これまでの流れを絶対にとどめさせてはならない。いまこそ、障害のある人が地域で当たり前のように暮らしていけるような社会を目指していく必要がある。教育や、人と人との関係、障害のある人たちへの社会の支援、そして、施設の在り方そのものが問われている」と指摘しています。

措置入院「だまして退院」、予兆気づいたが 相模原殺傷 久永隆一

津久井やまゆり園

植松聖容疑者をめぐる経緯



2012年12月 津久井やまゆり園で非常勤職員として勤務を始める

13年4月1日 常勤職員になる

15年1月 背中全面の入れ墨写真をツイッターに投稿。「会社にバレました。笑顔で乗りきろうと思います」

16年2月15日 衆院議長宛てに「障害者を抹殺する」などと書いた手紙を持参

2月19日 園の聞き取りに「自分は間違っていない」と主張し、自主退職。津久井署が保護し、相模原市が措置入院を決定

2月20日 入院先で「ヒトラーの思想が降りてきた」と発言

3月2日 「症状消退」により、市が退院を決定

7月25日 都内のホームセンターで結束バンドとハンマーを購入。その後、知人女性と都心の高級焼き肉店へ

直後の午前2時50分に「beautiful Japan!!!!!!」とツイッターに投稿

事件発生 7月26日

朝日新聞 2016年8月26日
『考えを改めます』とだまして退院できた。植松聖（さとし）容疑者（26）の言葉に、友人の男性は驚いた。

今年3月2日。植松容疑者は相模原市の措置入院先を退院したばかりだった。

先立つ2月15日、衆院議長公邸に手紙を持参。障害者の大量殺人をほのめかしたうえ、「心神喪失による無罪」と事件後の処遇を記していた。「逮捕後の監禁は最長で2年まで」とし、その後の「自由な人生」のために、新しい名前や美容整形、5億円の支援まで要求していた。

同じ時期、「障害者が生きているのは無駄だ」などと書いたビラを、勤務先の「津久井やまゆり園」の周りで配り、園の聞き取りにも自説を曲げなかった。両親が何度も「間違っている」と諭したが、聞き入れなかった。

相模原殺傷1か月 家族の涙絶えず 読売新聞 2016年08月26日

19人が命を奪われ、27人が体と心を傷つけられた。安息の場を失った人もいる。不安を抱え続ける家族も――。相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で

起きた殺傷事件。発生1か月を迎えても、関係者の涙は乾かない。重傷を負った女性の母

親の胸中では、「障害者はいらない」と語る元職員植松聖容疑者（26）への怒りと疑問が膨らむ。「あなたにも大切な人がいるでしょう」

施設東棟1階の「にじホーム」で暮らしていた野口貴子さん（45）は、自室のベッドで眠っていた時、首を4か所刺された。うち1か所は深さ4センチに達していた。

「ベッドに横たわる貴ちゃんの姿が痛々しくて、見ていられなかった」。事件当日、藤沢市の自宅から病院に駆けつけた母の輝子さん（76）は振り返る。父の宣之さん（76）も「代われるものなら、自分が代わってやりたかった」。貴さんは緊急手術の末、何とか容体が落ち着き、今月9日に退院して園に戻った。にじホームでは、他の女性5人が犠牲になっていた。

貴さんが2歳の頃。なかなか言葉を発しなかったため連れていった病院で、障害があると告げられた。受け入れられず、家族の力で、どうにか話せるようにしてあげようと思った。

泳ぐことが好きな貴さんと自宅近くの江の島でたくさん遊んだ。お気に入りの音楽をかけながら車を走らせ、新潟や東北にも旅行に出かけた。着替えに食事、トイレの使い方などは輝さんが根気よく教えた。

どれだけ教えても会話ができるようにはならなかったが、輝さんは「貴ちゃんはちゃんと、みんなの言葉を分かっているの」と話す。

輝さんが体調を崩してしまったことなどで、貴さんは約20年前から、やまゆり園で暮らしてきた。自宅に帰って来た日は両親に甘える。

輝さんが「明日はホームに戻るんだよ」と声をかけると、翌朝には服を着替えて玄関で待っている。貴さんにとって、やまゆり園が「我が家」だ。事件後の入院中、見舞いに来た園職員が帰った時には、置いて行かれたと思ったのか、さみしかったのか、貴さんは声を上げて泣いた。輝さんも「大丈夫、帰れるからね」と言って一緒に涙を流した。

貴さんが一命を取り留め退院できた今、輝さんは安堵する反面、なぜ、植松容疑者が障害者を標的にして、このような事件を起こしたのか、との思いを募らせている。「私たちにとっては、大事な大事な、かわいい娘。容疑者にも親や大切な人がいるはず。どうして思いをはせられなかったのか」

社説：相模原事件1カ月 「憎悪」の背景 解明せよ 中国新聞 2016年8月26日

相模原市の知的障害者施設で入所者19人が殺害された事件からきょうで1カ月たった。事件の全容は見えてこない。重苦しい空気に覆われたような感覚から抜けきれない。

逮捕された元職員の容疑者に対する警察の取り調べが続いているが、今回の事件は、行政、医療、司法の境界線で起き、対応のまずさや連携不足も指摘されている。戦後最悪とされる事件である。課題を多角的に掘り起こす姿勢が欠かせない。

厚生労働省は今月、有識者のチームで事件の検証と再発防止策の検討に乗り出した。気がかりなのは、容疑者に措置入院歴があったことから、運用の強化を含む制度の見直しが最大の焦点になっていることだ。

措置入院は、精神疾患のために自分や他人を傷つける恐れのある人を強制的に入院させる制度である。

容疑者は2月に犯行を予告する手紙を衆院議長公邸に届け、施設や警察にも同様の暴言を繰り返した。急きょ措置入院が決まったが、12日後に退院し、その後、凶行に及んだ。退院後の動静を行政や警察はフォローできていなかった。

退院の判断の妥当性や、退院後の対応が重要な論点になるのは当然のことだ。ただ、退院要件の厳格化や過度な監視に対しては、障害者団体などから懸念の声が出ている。「精神障害者が危険な存在」という偏見や差別を助長することにつながっては本末転倒であろう。慎重な議論が必要だろう。

入院医療中心から地域生活中心へ、という精神医療の流れに沿った対策が求められる。

福祉施設の防犯対策も強化される方向だ。不審者の侵入を防ぎ、どう通報するのかなどが課題となる。しかし、人の出入りや地域との交流を大幅に制限するようなことになれば、施設が孤立し、逆効果になりかねない。地域社会で見守る仕組みも重視したい。

3年以上も施設で働き、障害者と接していた容疑者が、いかにして障害者に差別意識を募らせ、憎悪を向けるようになったのか。犯行の背景も解き明かしていかなければならない。

容疑者は、「目標は重複障害者が安楽死できる世界」と、衆院議長への手紙に記していた。命に優劣をつける「優生思想」を想起させる言葉であろう。

「安楽死計画」の名の下に精神障害者や知的障害者を組織的に殺害したのはナチス・ドイツだ。同次元では扱えないものの、日本でも負の歴史があることを忘れてはならない。

1948年に施行された旧優生保護法である。遺伝性疾患や精神障害のある人々への不妊手術を認めていた。96年に母体保護法に改正されるまでの間に、「医師の申請」による不妊手術は約1万7千件に上ったというから驚く。わずか20年前までのことである。

相模原の事件はまれに見る凶悪犯罪ではあるが、特異な事件として済ませてはなるまい。私たちも無意識のうちに、他者を排除してはいないか。誰にでも潜んでいる、心の闇と向き合う必要がある。

誰もが年老いたり事故に遭ったりして、いつ障害者となるのか分からない。事件が日本社会に問いかけているものに、目を凝らさなければならない。

社説：相模原事件が問いかけるもの

日本経済新聞 2016年8月26日

相模原市の障害者施設で入所者19人が殺害された事件から1カ月がたった。全容はまだ解明されていないが、社会的な弱者を狙ったこの事件が私たちに問いかけているものは重い。調べに対して容疑者は、一貫して「障害者はいなくなればいい」などと主張しているという。事前の準備や犯行状況をみても妄想や薬物の影響ではなく、極めて偏った強固な思想による犯行だったことをうかがわせる。

なぜ容疑者は障害者への強い差別意識を抱き、それが強い殺意にまで飛躍したのか。同じような悲劇を繰り返さないために、容疑者に対する医学的見地からの調べはもちろん、こうした犯罪を生む土壌が広がっていないかどうか、私たちの足元を見直してみる必要がある。

欧米では近年、自分と異なる民族や宗教、性的少数者などを敵視し、攻撃する「ヘイトクライム（憎悪犯罪）」と呼ばれる犯罪やテロ行為が目立っている。相模原の事件は、障害者を一方的に敵視する姿勢や犯行を予告するゆがんだ自己顕示欲などに、憎悪犯罪と似通ったものを感じさせる。

憎悪犯罪の背景には、他者の行動や考えに不寛容な風潮や、格差の拡大といった社会の分断があるとされる。どんなに極端な主張でも、インターネットで検索すれば同じ思想の人たちに行き当たるといった問題も指摘されている。

周りを見渡せば、だれにでも思い当たるような場面があるはずだ。障害者や高齢者に対する虐待や差別は、日常の生活の中でも見聞きする。今回の事件は、「特異な容疑者による特異な犯罪」ではないかもしれない。

障害者に限らず、子どもやお年寄りのための施設を、この事件のような悪意からどう守っていくかも大きな課題だ。高い塀で囲って隔絶することが望ましい対策とは思えない。行政や自治体、警察などが一体となって、「地域に開かれ、犯罪にも強い」施設づくりに知恵を絞っていく必要がある。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

